
僕の歌声は、貴女だけの為に。

水城翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の歌声は、貴女だけの為に。

【Nコード】

N1232E

【作者名】

水城翼

【あらすじ】

ボーカロイド。それは、そのソフトのキャラクターが入力したとおりの歌を歌ってくれるというパソコンのソフトである。私が出会ったさまざまなボーカロイドの中で、もっともおかしな出会いをしたのが、ボーカロイドのカイトだった。どんな出会い方をしたかは…ネタバレになってしまうので小説の本文の方で！！

ブローグ

ボーカロイド。

それは、そのソフトのキャラクターが入力したとおりの歌を歌ってくれるというパソコンのソフトである。

私が最初に迎えたボーカロイドは“MEIKO”だった。

メイコのソフトが家に来て、私はすぐにソフトのインストールを開始した。

インストールが完了すると、私は驚いて腰を抜かしてしまった。

「初めまして、マスター」

なんと、メイコが実体化したのだ。

茶色の短い髪に、赤い服。

パッケージどおりの格好で、私の前に立ちにっこりと微笑んでいる。

ソフトが実体を持つなどありえない。

だけど、実際今メイコは実体を持っている。

メイコに触ることもできたし（実際に触ってみた）、メイコと会話することもできるのだ（実際に会話してみた）。

どうしてか聞いてみたら、「そういうもんだ」って返されて、私は
あいまいに「はあ」としか言いようがなかった。

まあ、メイコの説明はここまで。

今度はKAITOの話をしよう。

ブローグ（後書き）

微妙な終わり方で申し訳ないのですが…いかがだったでしょうか？
てか、まず謝るときます。

ほんとにすみません（土下座）

二二 動画を見ててはまってしまつて…。

ボーカロイドの中ではカイトが一番好きです。

ついこの間めでたくカイトマスターになりましたよ！！

てかカイト操作難すぎるよ！！ありえないよ！！

ということなので更新が遅れるかもです。

ごめんなさい（土下座）

KAITOとの出会い

カイトは私が道端で拾ってきた（爆）、壊れかけたボーカロイドだった。

実体化したままのバグが起こっていたのだ。

メイコ達ボーカロイドはインストールしたパソコンを離れることは出来ない。

だからパソコンが家にある場合はメイコはせいぜい家の中くらいまでしか実体化することは出来ないし、外でのパソコン所持の場合、近くにマスター（各ボーカロイドの所有者のこと）がいるはずだった。

カイトの周りにはそれらしき人物が見当たらなかった。

だから家につれて帰った。

がちやり

家のドアを開けると、メイコがすぐに走ってくる。

「マスター、おかえりなさ…!？」

メイコが息をのんだ。

帰ってきた私の背中のカイトを見て、

「それ：“K A I T O”ですか…？」

そう言った。

「そう。壊れてたし、周りにマスターが見当たらなかったからつれて帰ってきたの。」

「すごく傷がありますね。」

私が拾ってきたカイトの外見は酷かった。

体中傷だらけだったし、指が何本か外れて、赤い線や青い線が何本か飛び出ていた。

メイコがカイトを運ぶのを手伝ってくれながらカイトの指をまじまじと見つめる。

「直りますか？」

メイコが心配そうに話しかけてきた。

「うん。多分、外見はパソコンのソフトだからパーツの取替えくらいで済むと思う。でも」

「でも、何ですか？」

「でも、この外見から思うに、多分このカイトは前のマスターになり酷い目に合わされていたんじゃないかって思うの。きっと精神

の方へのダメージのほうが酷いと思う。」

「アンインストールしてみてもどうですか？」

アンインストールして、もう一回インストールしてしまえば、ボーカーロイドの記憶は消える。

メイコはそれを利用しよう、というのだ。

「そうね…。」

カイトのアンインストールは、失敗した。

どこでも実体でいられるバグが原因のようだった。

精神のダメージは、私達と暮らしているうちに癒えてくれればいい、と願いながら私はカイトの修理を始めた。

私は機械の仕事に携わっている。

なので、カイトは無事に意識を取り戻した。

しかし、目が覚めたカイトの様子はおかしかった。

KAITOとの出会い（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。
なるべく早めの更新を目指しておりますので、どうぞよろしく願
いします。

存在理由

予想は、していた。

でも、現実はその甘くはなかった。

カイトが目を覚ましたかと思うと、いきなりその綺麗な蒼い瞳を大きく見開いて恐怖の色をにじませ、奇声をあげた。

そうしたかと思うと、瞳に涙をにじませ、カイトは自分の腕を頭を守るようにして覆った。

いきなりのカイトの行動に戸惑いながらも、私はカイトを安心させようと話しかけようとした。

そして気付く。

カイトが小さく、何かを言っていることを。

耳をすまして、カイトが何を言っているのか確かめた。

……。

……。

……聞かなきゃよかった。

…聞かなければ、このカイトの前のマスターへの怒りも少しで済んだというのに…!!

カイトは、こう言っていたのだ。

「ごめんなさい、壊さないでください」…と。

許せない。

許せなかった。

ボーカロイドのマスターは、そのボーカロイドの歌声を必要とし、ボーカロイドを家に迎える。

そして、家に迎えられたボーカロイドは、マスターに愛情をもらい、そしてより人間らしく歌ってくれるようになる。

つまり、マスターに必要とされなくなったボーカロイドは存在理由をなくしてしまうことになるのだ。

自分で求めた歌声なのだから、最後まで責任を持って愛情をそそぐべきだ。

それを、このカイトの昔のマスターは…。

私の目の前で頭を抱えて震えているカイトを見て、私は思わずカイトの頭に手を伸ばした。

存在理由（後書き）

目指せ毎日更新！！

とは言ってみたものの、あまりうまく行きそうにないです。
明日くらいでぶつつり途切れるかもです。

僕の歌声は…。

「…カイト…」

私が伸ばした手に気付いたカイトは、

バシッ！！

…私の手を振り払った。

「…あ…っ」

呆然とする私に、カイトは涙ぐんだ瞳でこちらを見て、小さく声をあげた。

「じ、ごめんなさ…ッ」

カイトがあわてて私に謝った。

…暴力を振るわれると思ったのかな…

「大丈夫だよ、カイト」

私はカイトを安心させようと、にっこりと微笑んで、カイトの頭を撫でた。

「私は貴方に危害は加えない。だから、そんなに怖がらなくていいんだよ？」

「…でも…ッ！！」

カイトの頬を、綺麗な涙がツーツ、と伝う。

「…怖いん、です。他人を、見てると、…みんなが、僕を…傷つけようとしてるって…思えて…ッ！！」

そのカイトの涙は、カイトが生まれてから今までにどれだけつらい思いをしてきたかを、鮮明に物語っていた…。

「…うん。分かったよ。大丈夫。カイトが安心して暮らせるようになるまで、私はずっと待つてる。…私はカイトのマスターだもんね。」

そして私は、カイトに向かって大きく腕を広げた。

いつでも私はカイトの味方だよ。だから、安心して。

そんな願いをこめて。

「今はつらくても、いつか幸せになれるときが来る。みんなで笑えるときが来る。…早く、そんな幸せな世界が訪れますように。ね？」

「…………マスター」

「…カイト…！！」

今までずっと黙っていてくれたメイコが驚きを隠せないという声でカイトの名を呼んだ。

だって。

カイトが…私のことを

“マスター” っと呼んでくれたんだよ…！？

それは、カイトが私をマスターとして認めてくれた瞬間。

私はつい嬉しくて、カイトを抱きしめてずっと泣いてた。

カイトは私を突き放したりせず、静かに私にこう言った。

「僕の歌声は、貴女だけの為に。」…と。

僕の歌声は…。(後書き)

なんか続く予定です。

え、てかもう終わった感じなんですが、もうちょい。

タグに「初音ミク」ってつけちゃいましたしw

ミク出さないとちょっと…

てかKAITOばかりでMEIKOが…(汗)

「めんなさい

「…マスター。苦しいです」

「…あ。ごめんッ!」

カイトの苦しそうなうめき声を聞き、私はあわててカイトから飛びのいた。

「ごめんねっ、つい。嬉しくて…」

「…嬉しかったんです。」

私が照れ隠しで頭を掻くと、小さくカイトが言った。

「え？」

「嬉しかったんです。…マスターの優しさが。前は、…こんなことありませんでしたから。」

悲しそうに微笑んで、カイトが言った。

「これからは、きっとマスターが愛情をいっぱいくれるわよ。…あ、私、メイコ。よろしく。」

いままで黙っていてくれたメイコが、笑顔でカイトに手を差し伸べた。

でも。

「……………めー、ちゃん？」

カイトの瞳に、ふたたび恐怖の色が戻った。

カイトの瞳がぐらりとゆれ、乱暴にカイトは自分の頭を押さえつける。

その状態のままカイトは崩れ落ち、奇声を上げた。

[illegible]

「か、カイト!!」

私があわてて、カイトを揺さぶる。

「……ッ！……す、すみません！僕……」

気付いたように、あわててカイトが言った。

「ううん、大丈夫。…それより、“めーちゃん”っていうのは…？」

「…昔の、マスターのところにいたMEIKOのことです…。僕以外の、唯一のボーカロイドでしたから、仲は良かったです。」

「…そう」

カイトは…誰に向かって謝っていたのかな…？

“めーちゃん”に？

でも、カイトは“めーちゃん”に何か悪いことをしたのかな…？

…でも、聞かない。それ以上。

過去よりも未来。

だから、私は…。

ごめんなさい（後書き）

シリアス一直線。

いつかもっと明るいカイトを書きたい（泣

明日…更新できるかな…

新しいボーカロイド達

カイトがメイコを見て謝りだした理由を昔のマスターのところにいた頃のことを思い出すから、と解釈した私は、完璧な新しい環境が必要だと考えた。

あの出来事があつた次の日、私は“初音ミク”、“鏡音リン・レン”を買った。

正直言ってお金が…なかったけど…ぎりぎりいけるかなあ、と思い、思い切って買ってしまった。

すべては、カイトのために。

「はじめまして、初音ミクですっ!!」

「鏡音リンです、よろしくお願いしますっ!!」

「鏡音レンです。よろしく」

ミク達をインストールして、これで六人大家族になった。

「マスター、この子達…“VOCALOID2”ですか…?」

カイトがこそこそと耳打ちしてくる。

「マスター…お金、大丈夫なんですか?てか、どこから来たんです

？VOCALOID2を二つも買うお金…」

続いてメイコも耳打ちしてきた。

明らかにメイコが言ってきたことの方が色々と耳が痛い内容だったけど、それでも二人の表情がどこことなく嬉しそうで安心した。

「一気に大家族になって、にぎやかになりそうね！！ほら、二人ともあいさつしなきゃ！！」

「は、はい。そうですね、マスター。私はメイコ。よろしくね。」

「僕はカイト。よろしく。」

メイコはもちろん、カイトまでもが本当に自然な笑顔でミク達に語りかけた。

「…よかったあ。」

「え？」

「マスターが、優しそうなひとで。お兄ちゃんとお姉ちゃんが優しそうなひとで。リンちゃんとレン君が一緒に。よかった！！」

ミクが満面の笑顔で言うので、私達の間に自然と笑顔が広がった。

「これから、よろしく願いします！！」

新しいボーカロイド達（後書き）

しばらく更新しなくてすみません（汗）

いや、リアルが忙しくて…

ていうかリンちゃんとレン君の影が薄くてごめんなさい。
嫌いなわけじゃないんです。

むしろだいすきですよ。

次、きつと出番増えますよ。そう信じてますよ。

日常

「おはようっ、みんな!!……ってあれ？」

「お、おはようございます……ますたー……」

私が寝室から出て、みんなの部屋に行って様子を確認して。それで挨拶をしたら返ってきたのはカイトの声。

カイトを見ると、カイトの目のしたにはクマ。
「ってか目が死んでる。」

カイトにへばりついて気持ちよさそうに寝息をたてているのはVO
CALOID2のミク・リン・レンの三人。

状況からすると、きっとカイトは夜中に興奮して眠れないうつと三人の話を聞いていて、寝るに寝れなかったってオチだろう。

「カイト、大丈夫？」

「は、はい……なんとか。」

私が聞くと、カイトが弱弱しく答える。

「……あ。おはようございます、マスター。」

「おはようメイコ。……で、昨日、何があったの？」

メイコがミク・リン・レンの寝室からこちらの部屋に来て挨拶をしてきた。

私はメイコに事情を聞いてみた。

「あー…。昨日、ミク達が自分の部屋で始めは寝ていたんですが、急にカイトと寝たいって言い出して…。ミク達が私達の部屋で寝る代わりに私はミク達の部屋のほうで寝ていたんです。」

ちなみに、ボーカロイド達の部屋は“VOCALOID”組と“VOCALOID2”組に分けてある。

男部屋と女部屋に分けたほうがいいかな…。

今度希望を聞いてみることにする。

「あ、ちなみに。今日は私と、明日はマスターと一緒に寝るそうですよ。」

「ほんとに？」

「…ふあ？…むにゃ…おにいちゃん。おはよお…。」

ミクが目をこすりながら半分寝けたようすで起きてきた。それに続き、リン、レンも起きてきた。

日常（後書き）

久しぶりの…更新ですね。

すみません。許してください。

これからもこのようなことはあると思いますが、…どうか見捨てないでください…（泣

ありがとう

「よしっ！！みんな起きたようだから、早速レッスンを始めるよ！」

「わーいつ！！」

主にVOCALOID2のみんなが歓喜をあげた。

そうはせずとも、カイトとメイコも嬉しそうにしているのが目に見える。

「ほんとに年長組のふたりからレッスンする予定だったんだけど……カイト。カイトは寝てていいよ。疲れたでしょ？」

私はカイトとメイコの二人に目を向けて言った。

「あ……。すみません」

カイトが頬を赤らめて言った。

「じゃ。メイコ、いくよ。」

「はいっ。」

「……いつてらっしゃーい！！」

リンとミクが手を振って見送る。

レンはカイトと何か話していた。

「……っ、あの！マスターっ！！」

と、後ろからカイトの声がした。

くいつ

後ろが引つ張られる感覚がした。

「カイト…？」

振り返つてみると、すぐ後ろにカイトがいる。
服を引つ張っていたのはカイトだった。

「どうしたの？」

カイトのほうに向き直り、私はカイトの頭を撫でた。

頬を赤く染めて、目にはうつすらと涙を浮かべてカイトがこちらを
みつめる。

「…ありがとうございます」

ぼつりとカイトが言った言葉に、私は思わず考え込んでしまった。
私、お礼を言われるようなことしたかな…？

「…どうして？」

「マスターが、僕のことを気にかけてくれたのが…嬉しかったんです。」

マスターがボーカロイドのことを気にかけるのは当然だ。

それなのに…。

「ちょっと休んだら、すぐにレッスンしようね。」

私がそういつてカイトの頭を撫でると、カイトは頬を赤らめてうつむいた。

「…はい。」

ありがとう（後書き）

今の僕のカイト脳内設定…赤面症の泣き虫野郎。
ああ…だめですね。
すみません。

メイコの場合。

「…うんっ！よし、このくらいかな？さすがメイコ。調教も少しで済んだし。音程もよく取れてる。さすが年長者。えらいえらい。」

メイコのレッスンはスムーズに進んだ。

ボーカロイドの中で一番扱いに慣れているためか、それともメイコがまた成長したか。そのどちらか、あるいは両方だ。

「あの…マスター。」

「ん？何？」

練習がひと段落し、休憩をとっていたときに、メイコがおずおずと話を切り出してきた。

「こんなときに言うのもどうかと思うんですけど…カイトのことでお話が…」

「なになに？言ってみ。」

「はい。…最近は、平気なんですけど…。…ほら、前、あつたじゃないですか…。…その、カイトが、私を見て…正確には、カイトは、“めーちゃん”に謝りだした…事が。」

「…うん」

「あれからも、少しそんなことが…あつたんです。寝起きとかに…
二回。あと、たまに口を押さえてうずくまったり…」

それを聞いて、私はかなり驚いた。驚いて思わずその場に立ち上る。

「吐き気とか！？そんなになるまで!？」

そんな私を見上げて、メイコは冷静な瞳のままこう言った。

「いいえ。…違うと思います。ボーカロイドは吐き気は感じません。そのようにつくられています。」

「…じゃあ…どうして…？」

「…多分…叫び声を出さないようにしているんだと思います。…マスターに嫌われないように。」

「…え…？」

「これはあくまで推測です。でも、もしも私が同じ立場に立たされたのなら同じ行動をとります。」

「…っ、ごめん…よく、わからないんだけど…どうして…叫び声をあげないことが私に嫌われないことにつながるの…？」

「…初めて、ああいうことがあったとき…マスターは、戸惑っていましたよね？」

…たしかに…いきなりのもので、私は驚いた。…でも…なんで…？

「戸惑いは…いつしかあきれに変わると感じたのですよ…あきれら

れる。嫌われる。嫌われる。存在理由を失くす。これが私たちボーカロイドの方程式です。」

ボーカロイドは歌うための存在。

歌えなくなる、歌を奪われることはつまり、存在理由を失くすこと。その歌を紡ぐ“マスター”という各ボーカロイドの所有者に使われなくなることつまり、存在理由を失くすことにつながる。

…そんなことって…。

「最近、カイトの様子はどうか？」

「はい。最近は私と話していても、少しぎこちないですが、前よりは自然だなぁって思えるようになりました。ミク達が来てからは本当に生き生きとしていますよ。」

「そっかぁ！！…あ、そうだ」

「部屋、男部屋と女部屋に分ける？」

「…はい、お願いします…。」

メイコの場合。（後書き）

兄さんもといカイト買いました！！

やったね！ついに買ったよ！！

小説更新が遅いのはカイトと遊んでいたからでs

ごめんなさい。

増えましたね、ボカロ小説。

嬉しいかぎりです。

なんかひとつだけ浮いた話で悲しい（涙

あとカイトのことで語り合える人がリアルでもネット内でもできる
といいなあ…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1232e/>

僕の歌声は、貴女だけの為に。

2010年10月9日13時29分発行